

## 京都国立博物館所蔵敦煌道經

——『太上洞玄靈寶妙經衆篇序章』を中心に——

神塚 淑子

### はじめに

日本の京都国立博物館には、道教関係の敦煌写本を二点所蔵している。『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』<sup>1)</sup>五六頁に記載されている次の二点がそれである。

番号二五二 「太上業報因縁経卷第八」一卷

番号二五三 「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」一卷

このうち、前者の「太上業報因縁経卷第八」一卷は、首尾完具し、天宝十二載（七五三）に白鶴観で書写したという奥書がある。重要文化財に指定されており、日本国内に所蔵する敦煌道經としてよく知られている。

一方、後者の「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」一卷は、承聖三年（五五四）に道士朱世元が書写したという奥書があるが、この道經は道蔵（正統道蔵）には収められておらず、その成立については不明の点が多い。しかし、その内容から見て、六朝時代の靈寶經の成り立ちや六朝道教の展開を考える上で一つの示唆を与えて

くれる興味深いものである。

そこで、本稿では、この二つの写本の概略を述べるとともに、特に、後者「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」一卷について詳しく検討することにした。

### 一 京都二五二「太上業報因縁経卷第八」

まずはじめに、番号二五二「太上業報因縁経卷第八」の概略をみておきたい。この写本については、『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』五六頁のほかに、大淵忍爾『敦煌道經 目錄編』九六―九八頁、同『敦煌道經 図録編』一六六―一七〇頁、王卡『敦煌道教 文献研究——綜述・目錄・索引』一二六頁にも記載されている。<sup>2)</sup>

大淵忍爾氏はこれを「京都博物館蔵本二五二」と呼び、王卡氏は「京都二五二」と呼んでいる。本稿では、王卡氏と同様に「京都二五二」と呼ぶことにする。

京都二五二は、首尾完具した写本であり、首題と尾題が「太上

業報因縁経卷第八」とあり、首題の次行には「生神品第十九」という品題がある。首題・尾題を除き、品題以下、全一八三行の文が存する。道藏本の『太上洞玄靈宝業報因縁経』（道藏第一七四・一七五冊）と比べると若干の文字の異同があるが、内容に関わるような大きな相異ではない<sup>3)</sup>。卷末に奥書があり、「天寶十二載六月 日白鶴觀為皇帝敬寫」と記されている。尾題の周辺には、木筆による習字の跡があり、奥書の左には西蔵文が一行書かれている。また、卷末紙背には「常聞四海荒々生何无拯」と書かれた一行がある。

上述のように、京都二五二は国の重要文化財に指定されており、現在、その写真はインターネット上の「e 國寶 国立博物館 所蔵國宝・重要文化財」のサイト (<http://www.emusem.jp>) で公開されている。

『太上洞玄靈宝業報因縁経』は全十巻の經典で、六朝末から隋唐の際の成立と考えられている。経題のとおり、業報因縁に関する事柄が詳細に説かれており、六朝道教が仏教の因果応報思想をどのように受容吸収したかを知ることができる内容となっている<sup>4)</sup>。京都二五二は、その巻八「生神品第十九」を書写したものである。

「生神品第十九」は、思想的に興味深い内容を持っている。一人一人の人間の業報因縁の始まりについて、「人始めて身を受くるや、皆 虚无自然中より来たる。黄を廻し白を転じ、氣を構え

精を凝らし、元父 神を生じ、玄母 形を成し、天を承け地に順い、陰陽を合化す。両半の因縁もて、其の骨肉を稟く。其の昔業に資りて今縁に会遇し、象を乾坤に取りて懷を日月に含み、陰陽変化して神識往来せざるは莫し」（京都二五二の六行目から一一行目）とか、「人の生を受くるや、未だ先業より来たらざる者有らず。故に神を稟け質を挺するに、各々因縁有り、罪福吉凶は、悉く其の業に従う」（京都二五二の一五二行目から一五三行目）というように、人の生がそこから始まる「虚无自然」から説き起し、「氣」「精」「神」「形」「陰陽」など中国固有の觀念を用いつつ、その中に仏教の「縁」「因縁」の觀念を織り込んでいく。

ここに見える「両半」という語は、古靈宝経の一つである『太上洞玄靈宝智慧定志通微経』（道藏第一六七冊）に見えるもので、このように人間の身体形成過程と業の觀念とを結びつけることが六朝道教の因果応報の理論となっている<sup>5)</sup>。「生神品第十九」には、その他に、身体の各部位に宿る体内神のことや、人々の善悪を監視するために天上から遣わされた神々のこと、あるいは、死者供養として焼香懺悔・造経造像・貧窮者の濟度を行うことなどが説かれている。全体を通じて、中国固有の觀念と仏教思想との融合が顕著に見られる興味深い巻である。

この『太上洞玄靈宝業報因縁経』は広く世に行われたようで、敦煌写本にも多くの点数が残っている。王卡氏の調査によれば、『太上洞玄靈宝業報因縁経』の敦煌写本は二十五点、トルファン

写本が二点あり、巻八についても、敦煌写本が四点(京都二五二、スタイン一〇九一八、ペリオ二三六二、スタイン六〇六五)ある<sup>⑥</sup>。京都二五二はそのうちの一つである。

京都二五二の巻末の奥書は、これが天寶十二年(七五三)六月に白鶴観という道觀において皇帝(玄宗)のために書写されたことを示している。王卡氏の調査によれば、白鶴観という道觀は、道教関係の敦煌写本の中では、他の三点にも見える。その第一は、北京故宮博物院所蔵「慈善孝子報恩成道經」の巻末の「天寶十二載六月 日白鶴観為皇帝敬寫」という奥書<sup>⑦</sup>、第二は、ペリオ二二五七「太上大道玉清經」の巻末の「天寶十二載五月 日白鶴観奉為皇帝敬寫」という奥書<sup>⑧</sup>、第三は、ペリオ三五六二V「齋醮度亡祈願文集」の文中に、「今謹有白鶴観三洞某法師々々之所崇設」とあるのがそれである<sup>⑨</sup>。第一のものは、京都二五二の奥書と全く同文であることが注目される。白鶴観の所在地については、大淵氏はペリオ三五六二Vの説明の中で、「白鶴観は敦煌の代表的道觀なのである」(『敦煌道經 目録編』三六三頁)とするが、王卡氏は敦煌説のほか在京師説もあるとしており(『敦煌道教文献研究——綜述・目録・索引』二九六頁)、詳細は不明である。

## 二 京都二五三「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」

次に、二五三「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」について見ていく。この写本については、『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』五六頁のほかに、大淵忍爾『敦煌道經 目録編』七五〜七七頁、同『敦煌道經 図録編』一〇四頁、王卡『敦煌道教文献研究——綜述・目録・索引』一〇六〜一〇七頁にも記載されている。大淵忍爾氏はこれを「京都博物館蔵本二五三」と呼び、王卡氏は「京都二五三」と呼んでいる。本稿では、王卡氏と同様に「京都二五三」と呼ぶことにする。

京都二五三は、首部残欠、尾部完具の写本で、尾題に「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」とあり、末行に「承聖三年三月七日道士朱世元書」と記された奥書がある。承聖三年(五五四)というのは、南朝梁の元帝の年号である。三三六行の文が存しており、六二センチメートルに及ぶ長巻である。

京都二五三の尾題には「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」とあるが、その名称の文献は、道蔵には収められていない。しかし、これは、その題名から推測して、大淵忍爾氏・王卡氏がともに指摘するように、「靈宝中盟経目」(『三洞奉道科戒営始』巻四。道蔵第七六一冊)に著録する「衆経序一卷」に相当するものと考えてよいであろう。

京都二五三の内容は、陸修静の「靈宝経目」に名が見える靈宝

經(「古靈寶經」とも呼ばれる)のうちの三種の經典の文を抜粋したものである。その三種の靈寶經は、いずれも道藏に収められている。それを便宜上ABCの記号を付して挙げておく。

A 『元始五老赤書玉篇真文天書經』(道藏第二六冊)

B 『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』(道藏第二〇二冊)

C 『太上靈寶諸天内音自然玉字』(道藏第四九冊)

京都二五三の内容について、このABCとの対応関係に注目してまとめておくと、次のようになる。

1. 一行目から一六行目

首部が欠けていて原題を欠くが、内容から見ても、「元始五老赤書玉篇真文天書經第一」という題であったと考えられる。上記A『元始五老赤書玉篇真文天書經』巻上の六b五行目から七b一行目までに相当する。

2. 一七行目から一二八行目

「三元品戒經道君問難罪福第二」の題がある。上記B『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』の三二a一〇行目から巻末までに相当する。

3. 一二九行目から三三六行目

「靈寶諸天内音自然玉字下第三」の題がある。上記C『太上靈寶諸天内音自然玉字』巻三のa三行目から七a四行目までと、巻四の二b二行目から二六a四行目までに相当する。

以上が、京都二五三の内容である。

京都二五三について、これまで特に注目されてきたのは、その奥書のことである。上述のように、京都二五三には「承聖三年三月七日道士朱世元書」という奥書がある。南朝梁の承聖三年(五四)という紀年は、道教関係の敦煌写本としては最も古いものである<sup>10)</sup>。これをめぐって、大淵忍爾氏は、「確かに個人の手を転々することのなかったパリやロンドンの敦煌鈔本中の道經に関しては、六世紀のものは極めて少なく、然も総て北朝系の書法を伝えるものであり、且つ紀年を有するものは存しない。然るに本鈔本は梁末の紀年を有し、敦煌道經としては最古に属する、極めて特異なものである」として、その特異性に注目する一方、「ただ道藏未収の衆篇序經は、六・七米 或いはそれ以上に亘る長巻にあり、本鈔本以外はパリとロンドンとに各一点を存するのみで、他に存した形迹がなく、本文と奥書きとは同一人の手蹟の如くであり、今は暫く奥書きの紀年に従って扱ふこととする」と記している。

ここで大淵氏によって指摘されたパリとロンドンとに存する衆篇序經の鈔本というのは、スタイン六六五九とペリオ二三八六である。ペリオ二三八六については、その後、王卡氏の研究によって、スタイン五七三三がペリオ二三八六と筆跡が同じで、内容も連続していることから、もともと同一抄本であったと考えられると指摘されている<sup>12)</sup>。王卡氏の指摘に従えば、京都二五三について検討するための資料として、スタイン六六五九とスタイン五七三

三+ペリオ二三八六の二件(写本の数としては三点)の敦煌写本が存在することになる。

まず、スタイン六六五九から見ていくと、これは、首部残欠、尾部完具の写本で、尾題に「衆篇序經」とある。全部で四一五行の文が存しており、七五〇センチメートルの長卷である。<sup>13)</sup> スタイン六六五九の内容について、京都二五三の場合と同様に、上記A・BCとの対応関係を記しておくと同様になる。

1. 一行目から六三行目

首部が欠けていて原題を欠くが、内容から見て、「元始五老赤書玉篇真文天書經第一」という題であったと考えられる。上記A『元始五老赤書玉篇真文天書經』の卷上、四a七行目から七b一行目までに相当する。

2. 六四行目から一七六行目

「三元品戒經道君問難罪福第二」の題がある。上記B『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』の三二a一〇行目から卷末までに相当する。

3. 一七七行目から四一五行目

「靈寶諸天内音自然玉字下第三」の題がある。上記C『太上靈寶諸天内音自然玉字』卷三のa三行目から七a四行目までと、卷四の二一b二行目から二七b七行目までに相当する。

以上が、スタイン六六五九の内容である。

次に、スタイン五七三三+ペリオ二三八六について述べる。

スタイン五七三三は首部・尾部ともに残損し、十一行の文が存する小断片であり、大淵忍爾氏はこれを『元始五老赤書玉篇真文天書經』を写したものととして著録しているが、上記のように、王卡氏は、スタイン五七三三はペリオ二三八六と筆跡が同じで、内容も連続していることから、同一抄本として考えている。ペリオ二三八六は首部残欠、尾部完具の写本で、尾題はない。全部で三九六行の文が存しており、七二九センチメートルの長卷である。<sup>14)</sup>

スタイン五七三三の内容は、上記A『元始五老赤書玉篇真文天書經』卷上の三a一〇行目から三b一〇行目までに相当する。

ペリオ二三八六の内容は、次のとおりである。

1. 一行目から七〇行目

首部が欠けていて原題を欠くが、内容から見て、「元始五老赤書玉篇真文天書經第一」という題であったと考えられる。上記A『元始五老赤書玉篇真文天書經』卷上の三b一〇行目から卷末までに相当する。

2. 七一一行目から一六四行目

「三元品戒經道君問難罪福第二」の題がある。上記B『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』の三二a一〇行目から卷末までに相当する。

3. 一六五行目から三九六行目

「靈寶諸天内音自然玉字下第三」の題がある。上記C『太上靈

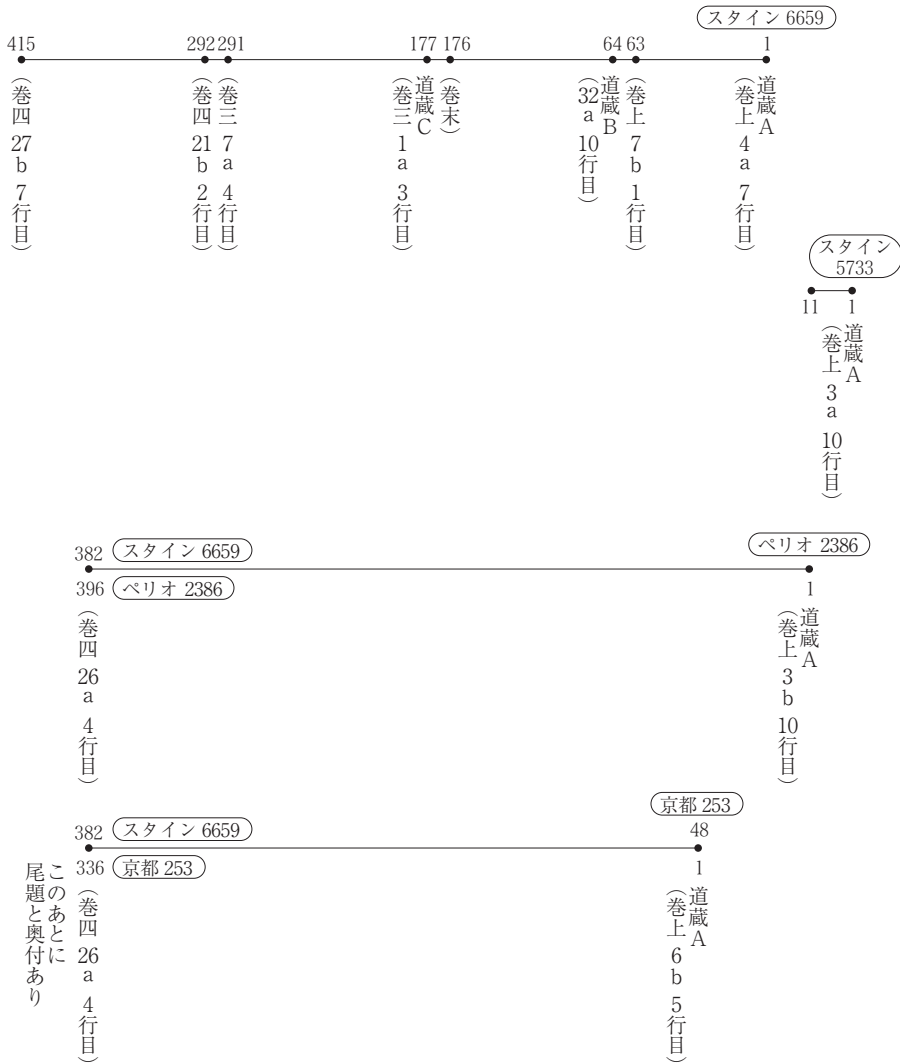


図1 スタイン6659、スタイン5733+ペリオ2386、京都253の相互関係

宝諸天内音自然玉字』卷三の一 a 三行目から七 a 四行目までと、卷四の二一 b 二行目から二六 a 四行目までに相当する。以上が、スタイン五七三三+ペリオ二三八六の内容である。

この京都二五三、スタイン六五九、スタイン五七三三+ペリオ二三八六の三件(四点)の敦煌写本の相互関係を、わかりやすいように図で表示しておく(図1)<sup>16</sup>。

図1から明らかなように、ペリオ二三八六と京都二五三は同じところで終わっており、京都二五三にはその直後に尾題と奥書がある。一方、スタイン六六五九はそのあととも文が続いていて、それは道蔵本『太上靈宝诸天内音自然玉字』(上記C)と一致する。ペリオ二三八六と京都二五三のように、その箇所

終わるテキストと、スタイン六六五九のようにそのあととも文が続くテキストとの、二種類のテキストが存在したのであろうか。

もし、二種類のテキストが存在したとすると、ペリオ二三八六と京都二五三の両写本には、スタイン六六五九と比べた場合、テキストとしての親近性が認められるのであろうか。このことを検討するために、念のため、この三件(四点)の敦煌写本について、文字の異同を調べてみると、三件(四点)の敦煌写本の間で小さな文字の異同はいくつかあるが、内容に関わるような異同はほとんどない。ただ、その中で比較的注目されるものは、次の四箇所である。

1. スタイン六六五九の一四二行目「建立静舎」  
ペリオ二三八六は書き直しの跡があり、「建立静観」に作る。  
京都二五三は「建立静寺」に作る。なお、道蔵本『太上洞玄靈宝三元品戒功德軽重經』(上記B)はスタイン六六五九に同じく「建立静舎」に作る。
2. スタイン六六五九の一八五行目「当爾之日、天朗炁清」  
ペリオ二三八六と京都二五三は、ともに「当天朗炁清」に作る。なお、道蔵本『太上靈宝諸天内音自然玉字』(上記C)は「当時、天朗炁清」に作る。
3. スタイン六六五九の二三二行目以下の誦  
スタイン六六五九と京都二五三は一行四句(二十字)で書かれているが、ペリオ二三八六は、一行三句(十五字)。道蔵本『太

上靈宝諸天内音自然玉字』(上記C)は、ペリオ二三八六に同じく一行三句(十五字)。

4. スタイン六六五九の二四一行目「无極大聖衆」  
ペリオ二三八六は五字分が空格になっている。京都二五三は「元始出玉文」に作る。道蔵本『太上靈宝諸天内音自然玉字』(上記C)は、京都二五三に同じく「元始出玉文」に作る。

以上の四箇所のうち、1は、仏教語(「寺」)が道教的な語彙(「観」「舎」)に書き換えられるという事例に相当する。一般に、敦煌写本には道蔵本と比べて仏教語が多く使われていると言われているが、この事例では、京都二五三だけが仏教語で、スタイン六六五九と道蔵本が道教的語彙、ペリオ二三八六は書き直しの跡があつて道教的語彙になっているという、やや複雑な形になっている。

しかし、ペリオ二三八六と京都二五三が、テキストとして親近性が高いかどうかという観点から見た場合、以上に挙げた四箇所の相異点のうち、ペリオ二三八六と京都二五三が同じである例は2だけであり、必ずしも親近性が高いとは言いがたい。したがって、文字の異同の点から見て二種類のテキストの存在を想定することは困難である。

ところで、京都二五三には、真贋に関する議論がある。上述のように、大淵忍爾氏は京都二五三が六世紀南朝の紀年を有することと注目してその特異性を指摘しつつも、内容その他の点から、

暫く紀年どおりのものとして扱うという判断をされたのであるが、藤枝晃氏は、京都二五三に使われた「徳化李氏凡将閣珍藏」という九文字の収蔵印が偽造であることを主たる根拠として、これが偽物であることを主張された<sup>18)</sup>。

本稿は、京都二五三の真贋問題を論じることが目的ではないので、踏み込んだ考察を行うことはしない。ただ、榮新江氏の指摘するように、写本の真贋を考えるに当たっては、外形的な面だけではなく、その内容から判断することも重要であろう<sup>19)</sup>。その点から見て、大淵氏が示唆し、王卡氏も指摘するように、道蔵に収められていない「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」なるものを偽造することは、その底本が存在していないのであるから、困難であったと言わざるを得ないのではないかと思われる<sup>20)</sup>。ちなみに、もし京都二五三が偽物であるとすると、伝世文献が存在しない以上、比較的似た形のものとして、同じ箇所が終わっているペリオ二三八六をもとにして書写されたということも、一つの可能性として考えられるのかも知れない。しかし、上に述べたように、文字の異同から見た場合、ペリオ二三八六と京都二五三が近いとも言いがたい状況にある。したがって、その可能性も低いのではないかと思われる。

### 三 道教史から見た「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」

京都二五三の真贋問題のことはひとまず置いて、次に、「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」という文献の内容そのものについて見ていくことにしたい。

上述のように、「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」という題名の文献は道蔵には見えない。しかし、道蔵に収める道教類書の中に五カ所、「衆篇経云(曰)」とか「衆篇序云」として、断片的に引用されて、その佚文が見える。それを列挙しておく、次のようになる。

1. 『道門経法相承次序』卷上(道蔵第七六二冊)、一六a……「衆篇経曰」として、A『元始五老赤書玉篇真文天書経』卷上、五a3行目〜五b3行目を引用。
2. 『要修科儀戒律鈔』卷八(道蔵第二〇?冊)、一五a……「衆篇経云」として、A『元始五老赤書玉篇真文天書経』卷上、五a6行目〜七行目、および、C『太上靈宝諸天内音自然玉字』卷三、二b6行目〜七行目を引用。
3. 『三洞珠囊』卷七(道蔵第七八一冊)、二〇a……「衆篇経云」として、A『元始五老赤書玉篇真文天書経』卷上、三b一行目〜四b五行目を引用。
4. 『上清道類事相』卷三(道蔵第七六五冊)、二b……「衆篇経云」として、A『元始五老赤書玉篇真文天書経』卷上、五



b 三行目を引用。

5. 『雲笈七籤』巻七、九b……「衆篇序云」として、A『元始五老赤書玉篇真文天書經』巻上、二a二行目～三行目を引用。

以上が、道藏に収める道教類書に見える「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」の佚文である。以上に挙げたものうち、前節で挙げた敦煌写本「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」(京都二五三、スタイン六六五九、スタイン五七三三+ペリオ二三八六)と重なるのは、1番から4番である。5番の『雲笈七籤』の引用だけが、敦煌写本「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」には見えない。

このほかに、敦煌写本に残る道教類書の中に見えるものが一例ある。次に挙げるものがそれである。上記の1番から5番に続けて記しておこう。

6. 日本国立国会図書館所蔵敦煌写本「道教叢書残卷」WB32-130……「靈宝衆篇序経云」として、C『太上靈宝諸天内音自然玉字』巻四、二四b八行目～二四b一〇行目を引用<sup>2)</sup>。

結局のところ、現在、我々が知ることのできる「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」は、道藏と敦煌写本に見える佚文を総合すると、次の①から③のような内容になる。

① A『元始五老赤書玉篇真文天書經』(道藏第二六冊)巻上、二a二行目から三行目、および、三a一〇行目から七b一行

目。

② B『太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經』(道藏第二〇二冊)三a一〇行目から巻末まで。

③ C『太上靈宝諸天内音自然玉字』(道藏第四九冊)巻三、一a三行目から七a四行目、および、巻四、二b二行目から二七b七行目。

現在、我々が知ることのできる「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」が、この文献の本来の姿をどの程度伝えているのかはわからない。しかし、少なくとも現存する文から見る限り、「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」に記載されているのは、A『元始五老赤書玉篇真文天書經』・B『太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經』・C『太上靈宝諸天内音自然玉字』それぞれの經典の中において、共通の傾向を有する部分である。その共通の傾向とは何かということ、この文献のタイトルから考えてみることにしたい。この文献のタイトル「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」には、「序」という語が含まれている。この〈序〉という語が、この問題を考える手がかりになると思われる。なお、右に挙げたものうち、1番から4番は、この文献を「衆篇経」と呼んでいて「序」という語は含まれていない。このことは別途考察の余地があるが、ここでは「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」に記載された事柄に共通の傾向が見られることを指摘するのが主眼であるので、行論の都合上、仮に、〈序〉という語を用いることとする。

以下、①②③の順に具体的に見ていこう。

まず、①について。A 『元始五老赤書玉篇真文天書経』という經典の大半を占めているのは、宇宙の始原の時間に出現し、天地万物の秩序の源泉とされる「靈宝赤書五篇真文」と呼ばれる神秘的な文字（これはのちに靈宝齋や授度の儀式にも用いられることになる）についての具体的な説明である。『元始五老赤書玉篇真文天書経』は、道藏では上中下三卷から成るが、現存する「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」の①は、その巻上であるので、ここでは巻上についてだけ述べることにしたい。巻上は四十二葉から成るが、冒頭から七b一行目までは、「靈宝赤書五篇真文」の由来や「靈宝」の定義など、「靈宝赤書五篇真文」についての総括的な事柄が書かれる。そして、そのあと七b二行目から巻上の終わり（四二b三行目）までは、東方・南方・中央・西方・北方それぞれれの「靈宝赤書五篇真文」の秘篆文の形とその解説、「靈宝赤書五篇真文」の効験、および、元始五老が現出したという五帝（青帝・赤帝・黄帝・白帝・黒帝）真符なるものの形とその解説、五帝真符の用い方などが書かれている。今、仮に、〈序〉に対するものとして、〈本文〉という語を用いるとすると、「靈宝赤書五篇真文」およびこれと関連する五帝真符なるものの形や解説、用い方・効験などを記した実質的な部分（巻上、七b二行目以降）は、この經典の〈本文〉に当たり、「靈宝赤書五篇真文」についての総括的な記載（七b一行目以前の部分）は、〈序〉に当たる

と見なされていたようである。現存する「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」の①は、その〈序〉の部分に相当している。

次に、②について。B 『太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經』は、靈宝経の教理の基盤をなす因果応報ということがどのようにして成り立っているのかを説いたものである。道藏本は一卷三十八葉から成る。冒頭から二二a四行目までのところでは、上元天官三宮三府三十六曹、中元地官三宮三府四十二曹、下元水官三宮三府四十二曹の名称と役割がずらりと列挙されている。これらは人々の功過罪福を司る官署を指し、ここでは、人々の行いの善悪に応じて仙界に行く人とそうでない人とを振り分ける仕事がなされているという。ついで、二二a五行目から三二a九行目までのところでは、「三元品戒罪目」という項目名のもと、天官・地官・水官の各曹が司る罪科、合計百八十条が具体的に列挙されたあと、上元・中元・下元の日（この日には神々が三元宮中に集合して人々の功過罪福・生死簿録の確認が行われるとされる）に、三元謝過の法に依って清齋を行うべきことが説かれている。

そのあとの三二a一〇行目から巻末までは、子孫が齋を行って祖先を供養することが何故、祖先の済度につながるのかということについて、太上道君が質問をし、天尊がそれに答えるという内容になっている。この太上道君と天尊との問答は、自業自得の原則に貫かれている仏教本来の因果応報説と、来世という觀念を持たず家単位で因果応報を考えてきた中国の伝統的な觀念との間に

生じた相克と、それら両者の考え方を調整しようとした靈宝經の立場がうかがわれる興味深い箇所である。現存する「太上洞玄靈宝妙經衆篇序章」の②の箇所というのは、ちょうどこの太上道君と天尊との問答の部分に当たっている。B『太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經』の全体から見ると、この部分は、それまでのところで淡々と列挙されてきた功過罪福を司る仕組みについての記述を承けて、因果応報説に関わる根本的な問題を自ら取り上げ、その正当性を説明した箇所である。B『太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經』の主題である功過罪福を司る仕組みについての詳細な記述(功過罪福を司る官署や「三元品戒罪目」)は、この道經の中では(本文)と意識され、それ以降の、因果応報説に関わる根本的な事柄を問答の形で説明した文は、(序)である意識されていたようである。現存する「太上洞玄靈宝妙經衆篇序章」の②は、この(序)に相当する部分である。

最後に、③について。C『太上靈宝諸天内音自然玉字』は、道藏本では四巻から成る經典である。その全体の概要については、別稿で述べたことがある。<sup>23)</sup>この經典の巻一・巻二では、東西南北の四方それぞれに八天、合計で三十二天の「八会内音自然玉字」の形(符に似た形状のもの)と三十二天の名称、および、三十二天それぞれの「玉訣」なるものがずらりと列挙されている。

続いて、巻三の冒頭から七a四行目までは、巻一・巻二の無味乾燥な記述からは一転して、突如、物語風の文章になり、新たな

劫の始まりの時に、神秘的な「靈書八会」(「八会内音自然玉字」と同じもの)の二百五十六字(三十二天のそれぞれに八字ずつ対応している)が天空に現れ、元始天尊がその意味するところを天真皇人に説明させ、その結果、衆生の罪が除かれて、全世界が一新されることが説かれる。この物語風の記述は、靈宝經の中心思想である「開劫度人」のことを具体的なイメージで表現したものであるとして注目される。現存する「太上洞玄靈宝妙經衆篇序章」の③の前半(巻三、一a三行目〜七a四行目)は、ちょうどこの物語風の記述の箇所に当たる。

このあと『太上靈宝諸天内音自然玉字』は、巻三の七a五行目から巻四の二一b一行目まで、三十二天の各八字の文字の説明が長々と続く。これは天真皇人による「靈書八会」についての解説であると考えられ、天の「内音」と呼ばれる梵語的な響きを持つ神秘的な呪文のようなものだが、「无量洞章」と呼ばれる五言詩を含めた言葉によって説明されており、きわめて難解な部分である。それが終わったあと、巻四の二一b二行目から巻末までは、天真皇人が自分の過去世のことを語るという形で、「龍漢以來」の長大な時間にわたる輪廻転生の歴史が述べられ、最後に、伝授の規定などが短く記される。現存する「太上洞玄靈宝妙經衆篇序章」の③の後半は、この巻四の二一b二行目以降の部分に相当する。

天真皇人の過去世からの生まれ変わりの歴史が『太上靈宝諸天

内音自然玉字』の中に記されていることの意味を考えてみると、『靈書八会』という天から示された神秘的なものについて人々に解説した天真人は、非常に重要な神格であることを印象づける役割を果たしているように思える。元始天尊については、『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』の中に詳しい前世物語が記載されている。靈宝經の元始旧經の中で、前世のことがとりわけ長文にわたって記されている神格は、元始天尊と天真人である(左玄真人と右玄真人のことも元始天尊に付随する形で出てくるが、これは元始天尊の前世物語の一部分と考えてよいであろう)。ちなみに、靈宝經の新經には、葛仙公の過去世のことが長々と記されている。これも、新經において葛仙公がきわめて重要な役割を果たす存在であるからである。<sup>②</sup>『太上靈寶諸天内音自然玉字』の中に天真人の前世のことを記すことによって、靈宝經の作者は、元始旧經において天真人が元始天尊に次ぐ重要な神格であることを示して権威づけ、そのことを通じて、天真人が解説した「靈書八会」なるものが、靈宝經の元始旧經の中で重要なものであることを示唆したと考えられる。現存する「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」の③の後半にあたる巻四の二一b二行目以降の部分は、そういう性格を持っている箇所である。

以上、現存する「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」の文①②③が、三つの靈宝經(A『元始五老赤書玉篇真天文書經』・B『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』・C『太上靈寶諸天内音自然玉字』)

のそれぞれの中でどのような部分に当たっているのかを確認した。①は「靈宝赤書五篇真文」や五帝真符の形とその用い方・効験などを記した実質的な部分が〈本文〉であるのに対して、「靈宝赤書五篇真文」の由来や「靈宝」の定義といった総括的な説明の文が〈序〉とされており、②では、功過罪福を司る官署のことや「三元品戒罪目」が〈本文〉であるのに対して、因果応報説に関わる根本的な問題点を説明した文が〈序〉であるとされている。また、③の前半では、三十二天の名称やその「玉訣」が〈本文〉であるのに対して、「開劫度人」の場面の物語的記述が〈序〉とされ、③の後半では、天真人による「靈書八会」の解説が〈本文〉であるのに対して、その天真人の前世についての話が〈序〉とされている。

今、仮に、〈本文〉という語を用いたが、それぞれの道經の中核部分を〈本文〉とすると、〈序〉は〈本文〉についての総括的もしくは補足的説明であると見なすことができる。この〈本文〉と〈序〉という区別は、靈宝經の成り立ちを考える上で興味深い問題を含んでいるように思える。上に述べたように、〈本文〉に相当するのは、①の「靈宝赤書五篇真文」や五帝真符、②の功過罪福を司る官署や「三元品戒罪目」、③の三十二天の名称・「玉訣」や「靈書八会」の解説などであるが、これらは本来、秘伝的要素の強いものに由来する場合が多いと考えられる。靈宝五符などの呪符信仰との関係が考えられる「靈宝赤書五篇真文」などは

その見易い例であろう。そして、そうした秘伝的要素の強い〈本文〉を多くの人々に公開し、その意義を説明した文が〈序〉であったと見ることができよう。「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」は、まさにそのような〈序〉を集めた文献であったと見ることができのではないだろうか。

では、なぜ、靈宝經の〈序〉を集めた、このような文献が作られなければならなかったのであろうか。最後にこの問題を少し考えてみたい。

上にも述べたように、「太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」は、「靈宝中盟経目」(『三洞奉道科戒営始』卷四)に見える「衆経序一卷」に相当するものと考えられる。「靈宝中盟経目」には、陸修静「靈宝経目」の中で「元始旧経」の中の「已出」と書かれた經典と、「新経」として名が上がっている經典の名を載せたのちに、陸修静「靈宝経目」には見えない「靈宝上元金録簡文一卷」「靈宝下元黄録簡文一卷」「靈宝三元齋儀一卷」「靈宝明真齋儀一卷」「靈宝金録齋儀一卷」「靈宝黄録齋儀一卷」など靈宝齋に関する書物多数と、「太上智慧上品戒文一卷」という戒に関する書物などを載せ、最後に「衆経序一卷」を載せている。

別稿<sup>25)</sup>で述べたことがあるが、靈宝經の「元始旧経」は、宇宙論や救済論から修行論・養生論に至るまで体系立った經典群として構想されたものであったが、その全体が完成することはなく、未完のまままで終わっていた。陸修静「靈宝経目」に「未出」と書か

れた經典は「靈宝中盟経目」に名が上がっていないことから、そのことは確認できる。靈宝經の作者たちは、「元始旧経」を完成させることをやめて、その代わりに、「新経」を作成し、さらに、靈宝齋に関する書物や戒に関する書物などの作成に力を注ぐようになったということになる。なぜそのようなことが起こったかを推測してみるに、そこには陸修静の時代から百年余りの間における道教の変化が背景にあったと思われる。それはつまり、靈宝經の教理・思想体系の構築という時代から、靈宝齋などの道教儀礼の場において用いられるマニュアル的な書物や、教団の中で実際に重要な意味を持つ戒律について記した書物など、実用的・実践的な内容のものが必要とされる時代への変化といえることができるであろう。

靈宝齋や戒については、実は、「元始旧経」と「新経」において、すでに分散的に書かれていた。上に述べたように、①の「靈宝赤書五篇真文」や③の「靈書八会」などは、靈宝齋の儀式の中で実際に用いられるものであったし、②の「三元品戒罪目」のような戒の項目は、教団の中で実際的な重要性を持つものであった。その他にも、「十善因縁上戒之律」「十四戒持身之品」「上品十戒」「十二可從戒」(いずれも『太上洞玄靈宝智慧罪根上品大戒経』卷上)や、「智慧閉塞六情上品誡」「智慧度生上品大誡」「智慧十善勸助上品大誡」(いずれも『太上洞真智慧上品大誡』)など、靈宝の戒の主なものは、すでに「元始旧経」に出てきてい

た。しかし、それらの戒をまとめた小冊子のようなものがあれば便利だと考えられたであろうことは容易に想像できる。ましてや、種類の多い靈宝齋の場合、個々の齋の執り行い方についてのみ記した単独のマニュアルがあれば、わかりやすかつたであろう。そのような齋や戒についての実用的・実践的な部分を集めて利用しやすい形にし、単独の書物として作るということが行われた。それは、そのようなことが必要とされた背景が、陸修静の時代から百年余りの間に生じたからであろう。そして、その一方で、そうした実用的・実践的な部分には入らない、「靈宝」の觀念や「五篇真文」の総括的説明、因果応報説についての踏み込んだ解説、「開劫度人」の場面の物語的記述など、いわば靈宝經の理念に関わるような内容の部分が、〈本文〉に対する〈序〉と意識され、「衆經序一卷」なる書物が作られるに至ったのではないだろうか。そして、その「衆經序一卷」なる書物の編纂は、もし、京都二五三の奥書が信用できるものであるとするならば、南朝梁の承聖三年(五五四)よりも以前ということになるのである。

## 注

- (1) 『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』(京都国立博物館、一九六四年)  
 (2) 大淵忍爾『敦煌道経 目録編』(福武書店、一九七八年)、同『敦煌道経 図録編』(福武書店、一九七九年)、王卡『敦煌道教文献研究——綜

- 述・目録・索引』(中国社会科学出版社、二〇〇四年)  
 (3) 道蔵本との文字の異同については、注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』九六〜九八頁に詳しい。  
 (4) 中嶋隆蔵『太上業報因縁経における心報論』(『中国の宗教・思想と科学』国書刊行会、一九八四年)参照。  
 (5) 両半の思想については、麦谷邦夫『南北朝隋唐初道教教義管窺——以『道教義枢』為綫索——』(辛冠潔他編『日本学者論中国哲学史』、中華書局、一九八六年)参照。  
 (6) 注(2)所掲王卡書二四〜二七頁参照。  
 (7) 注(2)所掲王卡書一三三頁、施安昌主編『晋唐五代書法』(故宮博物院藏文物珍品全集)一八、商務印書館、二〇〇一年)一七二〜一七八頁参照。  
 (8) 注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』三〇四頁、同『敦煌道経 図録編』六一五頁、注(2)所掲王卡書一四七頁参照。  
 (9) 注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』三六三頁、同『敦煌道経 図録編』八九三〜八九八頁、注(2)所掲王卡書一三五頁参照。  
 (10) 紀年のある道教関係敦煌写本の一覧は、注(2)所掲王卡書一九一〜二九三頁参照。  
 (11) 注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』七六頁。  
 (12) 注(2)所掲王卡書一〇六頁。  
 (13) スタイン六六五九については、注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』六九〜七三頁、同『敦煌道経 図録編』九三〜一〇三頁、注(2)所掲王卡書一〇六頁参照。  
 (14) 注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』一七頁、同『敦煌道経 図録編』一頁。  
 (15) ペリオ二三八六については、注(2)所掲大淵忍爾『敦煌道経 目録編』七三頁〜七五頁参照。  
 (16) なお、DX一八九三(首尾残損し、巻題なく、九行の文が存する小断片。道蔵本『元始五老赤書玉篇真天文書経』卷上、五b行目から六a二

- 行目までに相当する)について、大淵忍爾氏はこれを『元始五老赤書玉篇真天文書経』を書写したものとして著録している(『敦煌道経 目録編』一七頁、『敦煌道経 図録編』一頁)が、王卡氏は、「今考此件紙質筆跡、均同京都二五三残抄本(『太上洞玄靈宝妙経衆篇序章』、疑両件原是同抄本、但文字不連続。今姑従大淵目定名)、『敦煌道教文献研究』——綜述・目録・索引』九二頁)として、京都二五三と同一抄本の可能性があることを指摘している。
- (17) 前田繁樹「敦煌本」と「道藏本」の差異について——古「靈宝経」を中心として——(『東方宗教』第八四号、一九九四年)参照。
- (18) 藤枝晃「徳化李氏凡将閣珍藏」印について(『学叢』第七号、京都国立博物館、一九八五年)
- (19) 栄新江「李盛鐸藏卷的真与偽」(『敦煌学輯刊』一九九七年第二期)五頁「敦煌写本的真偽鑑別是十分複雑の問題、写経本身・題記和収蔵印は三個应当分別考慮の因素。……総之、従李盛鐸藏卷的真与偽来看、判別一個写卷的真偽、最好能明了其来歴和伝承經過、再対紙張・書法・印鑑等外觀以鑑別、而重要的一点是從内容上加以判断、用写卷本身所涉及的歴史・典籍等方面的知識来檢驗它。我們不応輕易否定有價值的写本、也不能把學術研究建立在偽卷基礎上」
- (20) 注(2)所掲王卡書一〇七頁「又按京都藏本近人多疑是偽造品。但從此経内容看、實際不存在可供偽造者利用的底本。無論中国或日本学者、都不能捏造経名。太上洞玄靈宝妙経衆篇序章」
- (21) 国立国会図書館所蔵の敦煌写本 MSZ-1(30)は、道教類書『道要』の可能性がある。その内容については、拙稿「国立国会図書館所蔵の敦煌道教学写本」(『名古屋大学文学部研究論集』哲学五九、二〇一三年)参照。
- (22) 拙稿「靈宝経と初期江南仏教——因果応報思想を中心に——」(『東方宗教』第九一号、一九九八年)参照。
- (23) 拙稿「六朝靈宝経に見える本生譚——『太上靈宝諸天内音自然玉字』と『太上洞玄靈宝智慧定志通微経』の場合——」(『麥谷邦夫編『中国中世社会と宗教』、道氣社、二〇〇二年)。

京都国立博物館所蔵敦煌道経(神塚)

- (24) 拙稿「靈宝経に見える葛仙公」(『麥谷邦夫編『三教交渉論叢』、京都大学人文科学研究所、二〇〇五年)参照。
- (25) 拙稿「靈宝経における経典神聖化の論理——元始旧経の「開劫度人」説をめぐって——」(『名古屋大学文学部研究論集』哲学五一、二〇〇五年)。

キーワード…京都国立博物館所蔵敦煌写本、六朝道教、太上洞玄靈宝妙経衆篇序章

**Abstract**

Dunhuang Daoist Manuscripts preserved at Kyoto National Museum

KAMITSUKA Yoshiko

Kyoto National Museum possesses two Dunhuang daoist manuscripts, namely “Taishang Yebao Inyuan Jing (vol. 8)” 太上業報因緣經卷第八 <No. 252> and “Taishang Dongxuan Lingbao Miaojing Zhongpian Xuzhang” 太上洞玄靈寶妙經衆篇序章 <No. 253>. The former is well known because it is designated as national important cultural property, but the latter has not been much researched. This article examines the contents of the latter text in detail, and makes clear that it is an important document indicating the situation of the Daoism of the sixth century.

Keywords: Dunhuang Daoist Manuscripts preserved at Kyoto National Museum, Daoism in Six dynasties, Taishang Dongxuan Lingbao Miaojing Zhongpian Xuzhang